

讃岐香川の様々な文化発展を応援します。

文化通心

B U N K A T S U S H I N

2022春 No.113



長崎の鼻の上から撮影した屋島

辺境の人々の美しさを撮る

宮脇慎太郎さんは、高松を拠点に活動する写真家だ。瀬戸内国際芸術祭の公式カメラマンとして活躍され、令和元年には香川県文化芸術新人賞を受賞された。一方で、四国の辺境の美しさを追いかけて撮影をされている。辺境の暮らしは既に崩壊し始めていて決して永遠ではない。そうした辺境・辺縁の最前線で暮らす人々を撮ることをライフワークにしたいそうだ。

- 財団初釜「表千家流 蘇鐵庵の初釜」
- あわ／さぬき 借耕牛探訪記を上梓して――
- 特別寄稿 まちかど漫遊帖の16年
- 3月から5月までの茶華道情報／財団からのお知らせ

発行：公益財団法人 中條文化振興財団
〒760-0017 高松市番町2丁目1番12号
TEL (087) 826-3355 FAX (087) 826-2212
2022年春号 No.113 3月1日発行(季刊)



令和四年
財団初釜

「表千家流 蘇鐵庵の初釜」

コロナ禍の第六波が始まる直前の正月五日。京都より蘇鐵庵の水守清隆先生をお迎えしての初釜を無事に開催致しました。その後のオミクロン株の急激な感染拡大を考えると奇跡的に実現出来た茶会となりました。この二年間、多くのお茶会やイベントが中止となりました。財団では、県の蔓延防止措置の期間以外で、五人様茶会を続けてまいりましたが、また再開できるようにコロナ禍が収まるよう願っております。

● はじめに

財団の茶室は、今年で開館二五年目を迎えます。毎年正月五日に開催する初釜も通算二四回目となりました。茶室を建てて下さった木下孝一棟梁のご縁に始まり、これまで何度も本格的な茶事等をお願いして来た京都の道具商、蘇鐵庵さんは、北村美術館さんと共にいつも新鮮な驚きをもたらして下さいました。

さて、当日は快晴の小春日和。コロナ禍もあって、例年の半分の定員での開催となり、更にゆつたりと濃茶席、薄茶席、点心席とお楽しみいただきました。

● 濃茶席（美藻庵）

床の間には、大徳寺一九五世の翠巖和尚筆の「春入千林処々花」。春になれば誰にも差別無く公平に春光がふりそそぎ至るところで芽を出し花を咲かせます。江戸時代初期のお軸が掛けられました。

お花は大根島から取り寄せた牡丹の小さい赤い蕾。この時期になるとお家元の初釜などでも、大根島から取り寄せた立派な牡丹が飾られることは多いですが、今回は、古銅管耳の花入（清水道閑箱・伊達家伝来）に合わせて特に小さいもの。産地からすると間引かれてしまうような花をわざわざお願いして取り寄せられたそうです。

水守先生は、いつもお花には思い入れ



が深く、初めて席をお願いした時には、染付の「高砂」の本歌の花入（北村美術館蔵）に、ふきのとうを入られた時は、本当に驚いて、その美しさに感激したものです。今回も翠巖和尚のお軸に呼応して素晴らしい床にして頂きました。

点前座周辺のお道具は、釜が天正時代。与次郎の甕口獅子咬。炉縁は、法隆寺夢殿の古材。水指は信楽の瓢。

さらに茶入は、中興名物の古瀬戸、後春慶「宮城野」（小堀政恒・宗中箱・惺斎箱）。「様々に心そとまる宮城野の花の色々虫の声々」（千載和歌集）の歌を引

て命名されたものだそうです。仕覆は船越間道。

茶杓は、裏千家七代の竺叟宗室の共筒で、銘は「閑居」。

主茶碗はのんこうの赤。銘「仙窟」(了々斎・碌々斎箱)。

替茶碗は、惺入作の金と銀の嶋台。左入の香炉釉茶碗。と、それぞれにため息が出るような道具合わせで、お客様もひと時を堪能されました。コロナ禍で、濃茶の回し飲みは出来なくなりましたが、その分沢山のお茶碗が拝見できて良かったですというご意見もありました。

●薄茶席

蘇鐵庵さんは、近年は、親子三人でお茶会やお茶事もされています。ご亭主の長男の康隆さんは、いつも北村美術館の茶会をお手伝いされている茶の湯界の若手のホープです。今回は、財団のヤングヤング子供教室で長らくお稽古されて来た森末百合子さんが、お正月らしく振り袖でお点前をさせて頂きました。

床の掛物は、江戸後期の狩野派の絵師、鶴沢探泉筆の宝舟の絵。

「たることを知る心こそ宝舟 もののかずかず積み残すとも」の賛は、表千家九代の了々斎宗匠。

花入は、覚々斎作竹二重切。銘は「ヨワイ」(久田不及斎箱) 結柳と紅白の椿。脇床には南鐐六瓢香炉(中川浄益) 三宝の正月飾りの中に諏訪蘇山さんの青磁の虎香合がありました。

煙草盆は、中村宗哲の鯨手真塗。火入れは、南京赤絵で、水守さん独自のピンクがかった灰が綺麗に押されています。全体が象牙で出来た煙草壺は飴色が美しい。煙管は庸軒好筋が一本乗せられています。

た。

茶器は時代の梨子地菊紋棗。本来は棗として作られたかどうかわからないと説明がありました。全体が渋い金色で点前座が華やかになりました。

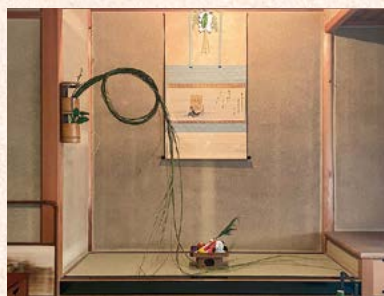
茶杓は、如心斎共筒の「破魔弓」(川上 不白添状)。

主茶碗は萩の「芙蓉峯」(吸江斎箱)。替茶碗が、保全の「蓬莱山」。弘入の赤楽は竹内栖鳳筆の雪ノ絵。古清水焼の注連飾。御本の俵など、正月らしいおもてたいお茶碗が並びました。

●点心席

三席目の床は、竹内栖鳳の「海日」が掛けられました。大波の向こうに日が昇るダイナミックな構図。そして、本来は濃茶席の床を飾る古染付「吉」の香合がそっと置かれていました。

点心席では恒例の福引もあって、初釜らしく楽しく賑やかに茶席を始める事ができて、良い一日となりました。



点前座のお釜は、真形・琵琶桐地紋。作者の堀山城浄甫は、京都名越三昌古浄味の次男で、元和元年に江戸に召されて幕府御用の釜師となった堀家の二代目。蓋は七宝繫ぎ紋。炉縁は真塗り模羽根田五郎塗は、相国寺ゆかりの古くから残る塗だそう。佐野長寛作。

風炉先は山水の絵。棚は即中斎好の小袋棚。水指は古染付・古木二鳥(中村雁半伝来)。杓立は、雲華焼筋柄杓立(永楽保全)。建水は長入作のエフゴ。蓋置は古銅靈芝。火箸は浄益作の松竹梅象眼。薄茶席は、濃茶席とは対照的に全体的に軽やかな組み合わせで、初春をのんびりと味わえる風情となりました。



牛と人が織りなす文化

あわ／さぬき

借耕牛探訪記を上梓して――

富田 紀久子

財団では、目まぐるしく変化する時代の中でも、若い人たちに、地元の文化を知って大事にして欲しいという願いがあります。これまでも助成金事業として、塩飽大工の建築の記録、笠居郷の郷土史事典や和田邦坊の調査研究など、長年の調査研究の成果を形に残したいという思いを後押ししてまいりました。そして、この度は、「借耕牛」についての本が、新たに上梓されることになりました。著者の富田紀久子さんは、長年に渡り借耕牛の調査をされ、絵巻物や紙芝居を製作して、子供たちに聞いてもらう活動を続けて来られました。

人はあらたに起こるものにはよく目を向けるが、伝統的なもの、消えゆくものには関心がうすれ、見失いがちになる。

しかし、中には、歴史の真実があり、未来永劫、忘れていけないものもある。

牛が農具を引き、人と共に田んぼを耕す。今では見られなくなった懐かしい風景の一つです。ウシは家畜化される以前から、ヒトと深いかわり合いをもっていた。

一万五千年前に描かれたラスコーの洞窟壁画にも、野生のウシを私たち新人類の祖先、クロマニヨン人が描いている。暗がりの洞窟の奥で、食料となる牛、命を託す牛を祈りを尽めて描いたのだ。

かつて讃岐は『日本一の米どころ』

『日本一 美味しい讃岐米』として日本中を席巻していたことはよく知られている。

当時、東北地方が冷害で不作続きだった頃、高松藩は温暖な季候風土で米の増産を奨励。人力では叶わない牛の強大な力での固い農地の深掘りなどに着目した。

それには阿波と讃岐の峠を農繁期だけに往還する借耕牛（牛のレンタル）が有効だった。

しかし、借耕牛慣行はその時点で始まったものではなかった。四百年前にさ



かのぼる。讃岐三白（塩、綿、砂糖）が藩の財政をうるおしていたが、外国からの安価なものに押された。阿波の二男・三男が牛を連れて出稼ぎにきていたのをそのまま、米の増産につなげた。慣行は江戸中期から昭和四五年迄、二五〇年にわたり讃岐の農業を支えた。

労働は過酷で、戻る頃にはやせ細り、力尽きて倒れる牛も少なくなかった。最盛期は八五〇〇頭が峠を越えたが、昭和四五年、米の減反や機械化でその姿を消した。

さて―― 秋

借耕牛のおかげでよく深耕された稲田



は、今に豊かな稔りをもたらす。さぬき平野は一面黄金の海。ゆさゆさ肥えた稲穂が日に照り返されつつ、一斉に泡だつ。中央に女王の如く鎮座ましますは、讃岐富士。左右対称、端正な双曲線。長く美しいドレスの裾を、ザ・ザ、ザ・ザと稲穂の波が洗う。熟した粳を啄み豊食して肥え太った雀たちが我が世の春を謳っている。

五日ごとに一度風が吹き、十日ごとに一度雨が降る。――五風十雨の季は流れ、"コンコンチキチ・コンチキチ"の村の神社に幟旗がはためく。『豊年万作』『五穀豊穰』稲は無事刈り終わった！祭りだ「刈り上げ」だ。

この日はかりはハレのご馳走に舌鼓。煮染め・揚げ物・バラ寿し・うどん、無礼講のお神酒も振るまわれ、村人総出の骨休みに酔い痴れる。古より続く豊かで揺るぎない「農」の習慣。刈田が静かになつた十一月――

阿讃山脈の八つの峠から「ガラーン・ゴローン」低い鈴の音が響き渡る。「ボー・ボー」牛追いの掛け声と共に、借耕牛がやってくる。蹄が痛まんようわらぐつはいて、四百年前の昔のままの旅支度。牛と人の麦飯弁当二升、水筒、替えのワラジ背負う。

大きな鋤物製の鈴は、害獣を追い払い、迷った牛の所在を知らせてくれる。

刈田の固い田んぼの土くれを耕し麦まきの準備したら借耕牛は一年の仕事を終え、ふるさと阿波へ戻る。

『借耕牛の唄』

一、借耕牛がやってくる
相栗峠を越えてよ

待ってたよ よく来たな
俺の家族も 楽しみにしてたぜ

二、借耕牛が働くよ
重い牛鋤を引いてよ
辛かろう もう少し

俺も親父も助かる 野良仕事
三、借耕牛が帰ってく
相栗峠を越えてよ

淋しいな また来いよ
俺の俵も 行っちゃイヤだと泣く

作詞／溝淵利博 作曲／岡本 正
編曲／大川かづゆき
唄／岡本 正・岡本由美子

この曲は五十年前、香川の教育関係の唄として、地元高校教師によって作詞・作曲された。かつて全国のエデュケーション・地元発オリジナルのテーマソングを競ってリリースしたのだ。そのまま歳月と共に忘れ去られていたのを、存在をつきとめ探し出し絵画展会場でBGMとして流した。哀調を帯びたメロディは「借耕牛讃歌」として来場者を包み込み、雰囲気盛り上げてくれ好評を博した。

「牛は文化を運んでくるけんな」

あわとさぬきを二五〇年間往還した借耕牛慣習は、単に出稼ぎ牛として米を運

んだだけじゃない。カリコ牛追いの馬喰の信用によって、理想の夫婦像『讃岐男に阿波女』の婚姻が多数成立したのだ。そして又、家畜と人が共に稼ぎに出ることを「共稼ぎ」といった。現代の夫婦で共に働きに出ることをいう「共稼ぎ」の語源といわれる。

借耕牛慣習も二五〇年続くと、語源やことばを産み、食文化や生活文化に大きな影響を及ぼす。借耕牛の代替えとして出現したのは、命の水である香川用水だ。渇水に喘いでいた私たちの暮らしを潤す。交通も完備され阿讃の交流は以前にも増して活発化している。

Culture（文化・教養）の語源が、Cultivate（耕す・育くむ）と知っていた。感じ入った。

「農」はすべての基。文化・教養・学問・生活 ありとあらゆる人々の活動を支え、発展させる源なのだ。



紙芝居かついであっちこっち♪ 観客の皆さんと双方の「カリコ対話」。ご依頼があれば駆け参じます。



まちかど漫遊帖の16年

高松まちかど漫遊帖 総合プロデューサー るいまま



まちは「ひと」によって作られます。ひとは多くの思いをもって「まち」を作ってきた。歴史のなかで悪役の座を与えられたひとでも100%悪ではなく、地域によって伝えられる話も違います。

まち歩きプロジェクト「高松まちかど漫遊帖」が始まって16年。市民ツアープロデューサーと呼ばれる歴代漫遊帖のガイドたちが、それぞれの思いをもってお客様をご案内してきました。

高松の総面積は375km²、人口は42万人余。その中で生まれる漫遊帖のコースは、歴史のなかに残された点をガイドたちが調査考察して繋ぎ、さまざまな物語を紡ぎます。おなじ地域をご案内しても、ガイドによってその味わいは千差万別。それが、高松まちかど漫遊帖です。

歴史書のなかに出てくるのは、のちのちの世まで偉業が伝えられた人々ですが、それもほんとうに誰かが見てきたことかといえ、残された文献や絵や石碑や地形や地質など僅かな資料から少しずつ紐解いたもの。

むかしむかし、この地に暮らしていた普通のひととは、その記録さえ残さぬまま日常を送っていました。でも、そこには喜びも悲しみもあれば晴れと曇りの日

もあり、決してつまらない人生ではなかったのです。漫遊帖の歴史語りのひとたちは武勇も語りますが、その日常も話します。それを聞きながら、歴史は、ある日突然かわるのではなくグラデーションで変化していく、それに上手にのれるひとといれば、なんとなく取り残されたような思いになるひともあるのだなと気付かされます。

よく、「漫遊帖はまち歩きでしょ。膝が悪くて歩けないから参加できないのよ」と言われる人がいるのですが、漫遊帖には「座学」というカテゴリも「体験」というカテゴリもあります。歩きながら聞くだけでは十分なことができないからと、歩いたあとと座学で詳しくと言うガイドもいれば、話だけでなく実際やってみないと身につかないという職人気質のガイドもいて、「まち歩き」などという域はとうの昔に超えてしまっていました。

たとえば、「昔は、讃岐の家では、家にひとりはおどんを打てる人がいたのに、いまは家でおどんを打たない。うどん県を掲げながら由々しきことだとはおもいませんか？」と、漫遊帖で、家にある道具でうどんを美味しく打つ方法を教え続けるうどん屋さんがあります。

うどん屋なら、うどんを買っていただく方が商売になるかもしれませんが、そんなことより、うどん打ちという文化の灯火を消さないことに意味があると彼はいます。

いろんなもので打ってみました。麺棒だけは代用がききませんでしたから、麺棒をお土産につけることにしましたと言います。うどん打ちを習った人々はマイ麺棒を持って家に帰ります。

靴職人は靴磨きを教え、和菓子職人は屋号に由来するまちを歩いてから和菓子作りをし、このまちを知ってもらおう。効率よりも未来をみつめ、いささか「変わっている」ひとのほうが魅力的です。

数年前から、漫遊帖に「数奇者茶会」「盆点前ガールズ」「野点ガールズ」という言葉が加えられました。茶の湯の世界は、難しく堅苦しくて、お茶会なんてとてもとも言われる方たちから「でも、お茶は好きなのよ」と耳打ちされ、ならばお茶をいただくところから始めましょうとなりました。

古の数奇者たちが残した茶会記は今読んでもわくわくするようなプログラム。数奇者茶会は、そんな茶会を担います。ピクニックのように野山にあるき山頂でお茶を頂く野点ガールズ。盆点前の小さな世界でお客様をもてなす盆点前ガールズ。茶の楽しみ方はさまざま。



臨済宗の僧・栄西が、中国の禅院で学んだ喫茶をもとに、日本初の茶の専門書「喫茶養生記」を書いたのは1211年。二日酔いで苦しむ將軍・源実朝に茶一服とともに「茶徳を誉める書物」としてこの書が献上されたことは「吾妻鏡」に記されています。

「お外にでてはなりません。ひとと喋ってはなりません。消毒消毒」と言われる時代だからこそ、抗菌作用もある茶を一杯喫茶することを忘れずに。

さて、この春の高松まちかど漫遊帖には「ひと」がでてくるコースがたくさん揃いました。山田蔵人、静御前、別所小十郎長行、細川頼之、源義経、那須与一、弥千代姫、香西資村、空海、南林、西嶋八兵衛、玉椿象谷、古田織部などなど。あなたが知っている人も知らない人も、語り部の思いが重なり魅力的な人となつて浮き上がってきます。

「まち」を「ひと」を存分に味わう漫遊帖の春は4月1日から。お待ちしておられます。

るいまま

春を感じる蓬の香り

「草餅」は「よもぎ餅」とも呼ばれていますが、日本に昔からある和菓子なのになぜ呼び名が違うのでしょうか。

平安時代には3月3日に婦女子が御形を採取して蒸して餅に搗き込んだことが記されています。昔は春の七草の一つ御形を使っていたようですが別名「母子草」といわれるため、煮詰めて作るのは縁起が悪いとされ室町時代よりヨモギを入れるようになったようです。

また江戸時代末には雛遊びに菱餅を飾るようになり、よもぎ餅を中心に白・青・紅、白・青・黄などが三重あるいは五重に飾られ、3月3日は草餅の節供ともいわれるほど草餅の意義は大きかったようです。

6世紀に著された中国の『荆楚歲時記』には、3月3日にハコグサの汁を蜜とあわせ粉にし食すれば邪気を払い疫病にかからないとされていたそうです。門前町のお土産に草餅や草団子があるのも邪気を払う縁起物だからなのでしょう。

菱餅のように蒸した糯米とヨモギを混ぜて餅とした切り餅。粳米粉をこねて蒸し、別にゆでて細かく刻んだヨモギを混ぜ餡を包んだあん餅。どちらがお好みですか？



お茶の風景(15)

コロナ禍の中で

江戸後期の禅僧・仙厓は、シワがよったりシミができる老いの様子を「老人六歌仙」に軽妙洒脱に描き、自慢話をくどくどするくせに気短かである深いなど自戒の思いも混じらせています。

コロナ禍で外出を控えた暇つぶしのテレビは、のべつ幕なしに健康や若返りの商品をすすめる、遂には、これでシワやシミが消えるとまぐしたてる有様で、老いの身につまされる当方には、まるで脅迫じみた宣伝ぶりです。

おおらかに微笑ましく老いを説いた仙厓さんは、加熱した現代のアンチエイジングぶりを何と見るでしょう。

しかし、常々思うのですが、お茶の先生方はみなさん若々しくご活躍なさっています。茶室での所作が足腰を鍛え、お茶の効能など、日々のご精進が培った若さでしょうか。一碗の茶には図り知れないものがあるようです。

それにつけても、早く、茶会を楽しめるような時に戻って欲しいものですね。



財団行事予定(3月~5月)

休館日水曜日

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、急遽中止になる事もあります。お出かけの前にご確認ください。

3月

- ◆ 書道教室 毎月第1・第3金曜日
森本義人先生
3月18日(金) 午前10時~12時
- ◆ 和菓子講座 毎月第2金曜日
高橋初乃先生
3月11日(金) 午前10時~12時
- ◆ ヤングヤング(子供茶の湯教室)
毎月第2・第4土曜日 山下純子先生
3月12日(土)・26日(土) 午後1時~
- ◆ 月に一度の喫茶室 毎月第3火曜日
3月15日(火) 午前10時~午後2時(受付)
自由なお時間にお出掛け下さい。
ランチは要予約です。

4月

- ◆ 書道教室 森本義人先生
4月1日(金)・15日(金) 午前10時~12時

◆ 4月月釜 五人様茶会

コロナ禍の中、桜咲く美しい季節となりました。肩の力を抜いて、御茶一服をお楽しみください。

日時 4月3日(日)
処 美藻庵 晴松亭(当財団茶室)
濃茶 武者小路千家 西村妙純
薄茶 武者小路千家 多田妙容
会費 6,000円(濃茶・薄茶・点心席)
入席時間(各席2時間15分を予定)
第1席 A席・B席 9時
第2席 A席・B席 10時30分
第3席 A席・B席 11時15分
第4席 A席・B席 12時45分
第5席 A席・B席 14時15分
申込 電話受付 3月7日(月) 10時~

- ◆ 懐石講座 三友居 山本勝先生
4月5日(火) 午前11時・午後3時

◆ 和菓子講座 高橋初乃先生

4月8日(金) 午前10時~12時

◆ ヤングヤング 山下純子先生

4月9日(土)・23日(土) 午後1時~

◆ 月に一度の喫茶室

4月19日(火) 午前10時~午後2時(受付)
自由なお時間にお出掛け下さい。
ランチは要予約です。

5月

◆ 書道教室 森本義人先生

5月6日(金)・20日(金) 午前10時~12時

◆ 和菓子講座 高橋初乃先生

5月13日(金) 午前10時~12時

◆ ヤングヤング 山下純子先生

5月14日(土)・28日(土) 午後1時~

◆ 月に一度の喫茶室

5月17日(火) 午前10時~午後2時(受付)
自由なお時間にお出掛け下さい。
ランチは要予約です。

「晴友会」
更新の
お知らせ

友の会「晴友会」の更新時期が参りました。
更新をご希望の方は同封の郵便振替用紙にて
年会費3,000円をお振込み願います。

期間 2022年4月1日~2023年3月31日

おいでまい香川

香川県内の様々な

イベント情報を随時更新中!

<https://oidemai.kagawa.jp/>



新型コロナウイルス感染拡大防止のため、急遽中止になる事もあります。お出かけの前にご確認ください。

茶道裏千家淡交会高松支部 TEL (087) 841-0605

<淡交会高松支部月釜> 前売券のみ・入席時間指定
大西・アオイ記念館 800円 9:30~15:00
4/3 席主:支部幹事
6/5 席主:國方宗純

武者小路千家香川官休会 TEL (087) 862-8574

<香川官休会月釜> 無量寿院 700円 9:00~15:00
3/6 席主:溝淵守保(みなづき会)
5/1 席主:西村妙純

高松市香南歴史民俗郷土館 TEL (087) 879-0717

<由佐城月釜茶会>

茶会7日前までの予約制(前売券・入席時刻指定)
第2研修室(和室) 9:30~(全6席)
3/20 席主:村川明美(表千家 真子宗博社中) 500円
4/17 席主:東山宗智(裏千家 溝内宗玲社中) 600円
5/15 席主:川原宗津(裏千家) 600円

料亭二蝶 TEL 0120-86-0220

4/29 季楽茶会(予約制)
席主:山本守蝸(武者小路千家)
料亭二蝶・め蝶の間 10,000円 10:00~(全4席)

● 財団からのお知らせ

中條文化振興財団

この春は、
美術館に
行きましょう!

お正月明けからのコロナ感染の拡大で鬱々と暮らしていらっしゃる方は、多いと思います。そんな皆様に、この時期、安全・安心なお出かけ先として、郊外の美術館等を3箇所ご紹介いたします。それぞれ高松から車で1時間以内。美しい景色や自然が楽しめる場所にあります。その上、近くには温泉や、美味しいお蕎麦屋さんもあります。また、道の駅などでお買い物もできるので、ちょっとした小旅行気分が味わえると思います。ぜひ、密を避けながら楽しいひとときをお過ごし下さい。

● 高松市塩江美術館

香川県にも色んなジャンルのアート活動がされている人がたくさんいます。美術館では、年4回の企画展で、そうした地元のアーティストの作品を多く取り上げて紹介していますので、要チェックです。

**ルカ・ローマ [The spiral—a new journey—]
2月11日(金・祝)~3月27日(日)**

ルカ・ローマさんは、三豊市在住で、イタリア・ミラノ出身の彫刻家です。石や木といった自然物を素材にして製作される作家さんです。今回は、自然が生み出す螺旋模様をモチーフにしたダイナミックな作品が並びます。県内では7年ぶりの個展。高松市芸術士派遣事業で、芸術士として子供たちにアートを伝える活動もされています。



● 高松市石の民俗資料館

牟礼町。八栗山のすぐ下に位置する所で、駐車場から階段を上がると、眼下にダイナミックな景色が広がります。こちら県内で注目の活動をされている作家の個展を中心に企画されています。

**うにのれおな「クレヨン画展」
2月26日(土)~3月21日(月・祝)**

この企画展は、去年の5月に開催したもののコロナ禍で会場が臨時休館となり、改めてリベンジ開催となりました。うにのさんは、高松市出身のイラストレーターで、クレヨン塗り重ねて表面を削り、細やかな模様をつけるスクラッチという技法を使い、主に動物や花をテーマに作品を製作しています。絵本のような温かみのある独特の画風で、ほっと癒やされると思います。



● 灸まん美術館

こちらはJRやことでの琴平駅から、徒歩20分で行けます。お散歩がてらお出かけされると楽しいと思います。灸まん美術館は、戦後の高度成長期に金子知事と共に香川のグランドデザインに関わった和田邦坊の画業館です。「灸まん」や「かまど」のお菓子のパッケージや「うどんの山田屋」のデザインは、皆さんにも馴染みがあると思います。近年、邦坊さんが大好きな学芸員によって、残された作品の整理や研究が行われ、展示内容が充実して注目を浴びています。今年は、没後30年ということもあって「味な世の中-和田邦坊の眼差し」という新しいテーマで展示されています。美術館には、カフェも併設されていますので、こちらも楽しみます。



編集後記

新年恒例の行事を終え成人の日が過ぎると節分・立春、そして市中には雛祭りの雰囲気がいよいよ。さの中でも春へと心が向かいます。ご家庭でも3月3日の雛祭りまで人形が飾られることでしょう。

香川県にも屋島四国村農村歌舞伎舞台の雛飾り・レトロな町の引田ひなまつり・宇多津の町家ひなまつりなどがあります。

素朴な人形や豪華な人形・年代ものの人形、また、時代による顔付きの違いなど楽しみ方や見方はいろいろあるでしょう。ウイルス感染など気にしないで、ゆっくりと雛祭り巡りをしたいものです。

心の底から「春よ来い!」と歌い願っています。

「声・情報お寄せください」

〒760-0017
高松市番町二丁目一十二
公益財団法人 中條文化振興財団編集部
TEL (087) 826-1335
FAX (087) 826-2212
info@chujo-zaidan.or.jp